

「倭国」を徹底して研究する

九州古代史の会

事務局 志摩野原水郷 1-1-10
〒818-0131 福岡県久留米市志摩野原
郵便振替口座 017503300000

NEWS NO. 92

代表幹事 灰塚照明 副代表幹事 高橋勝明

2000 JUL. 21

事務局長 相良祐二 編集担当 兼川晋

古代史研究と上代特殊仮名遣

六月例会と総会（十八日）の報告

六月例会は十八日（日）、早良市民センター3Fの視聴覚室で、一三時半から一五時まで荒金代表の研究発表「古代史研究と上代特殊仮名遣」。一旦休憩ののち、第十二回定期総会がありました。今年役員改選の年で、新役員の顔ぶれが決定しました。

研究発表「古代史研究と上代仮名遣」

仮名遣には現代仮名遣と歴史仮名遣があるが、さらに奈良時代には上代仮名遣というのがあって、エキケコソトノヒヘミメヨロおよびその濁音、合計二十の音節（『古事記』はその仮名も）が二類に書き分けられている。エはア行のエ、ヤ行のイエ、ワ行のエと三種類あったらしい。エ以外については甲類・乙類に分けられている。九ヶにおよぶ資料によって、古代の文献資料を読む場合の上代仮名遣の大切さを示された。

第十二回定期総会

○一九九九年の事業報告（ニュース九一号参照）を承認しました。

○一九九九年の会計報告と会計監査報告（十二ヶ参照）を承認しました。

○役員改選を行いました。新役員の顔ぶれと担当は次の通りです。

- 代表幹事 灰塚照明
 - 副代表幹事 高橋勝明
 - 常任幹事 事務局次長 相良祐二
 - 常任幹事 事務局次長 益田哲男
- 幹事（編集） 兼川晋

- 幹事（会計） 恵内慧瑞子
 - 幹事（調査） 荒金卓也
 - 幹事（資料） 加茂孝子
 - 幹事（見学会） 片岡格
 - 幹事（図書） 鈴木清士
 - 幹事（庶務） 淵江順三郎
 - 幹事（編集） 松中祐二
-
- 監査 島田長男
 - 監査 市吉正弘

二期四年間、代表幹事を引き受けていただいた荒金代表が交替を希望され、柴藤幹事と葉山監査が退任されました。長い間ご苦勞様でした。新旧代表幹事の挨拶がありました。

○新役員による二〇〇〇年度の事業計画を審議して可決しました。八月、十二月はお休み。十一月は見学会。特別例会二回。ニュース百号を記念して、合本をつくることにしました。

○二〇〇〇年度予算（十二ヶ参照）を審議して可決しました

○会員名簿を配布。六月十八日現在、会員は一一三名です。

高良玉垂と大善寺玉垂の古跡を訪ねる

五月(二一日) 見学会の報告

五月二一日(日)、午前八時に天神日銀前を出発。途中からの参加者を拾って「高良玉垂と大善寺玉垂の古跡を訪ねる旅」は合計四三名に膨らみました。

最初の訪問地は大牟田市黒崎玉垂神社。高良玉垂は有明海に突き出たこの半島に大善寺から上陸して矢部川を上り、鷹尾八幡、八女を経由して高良に鎮座したと伝えられています。

次は瀬高町長島のこうやの宮。ここは七支刀を持つ人形や南方風俗の人形、北方風俗の人形などが祭つてあるので有名なお宮ですが、トタン屋根の粗末な社を近所の人たちがひっそりと守りつづけておられました。

大和町に入ると鷹尾神社。ここは昔、神功が田油津媛を討つたときの上陸地だと伝えられており、祭神は仲哀、神功、応神

の三神。玉垂もここを経由して高良に上ったといえます。

また、大川市酒見の風浪宮も祭神は少童命。神功が新羅から帰還されたとき、白鷺を見て、これぞ少童命の化身だろうと考

え、その鳥のとまったところに少童命を祀り安曇連磯良丸を齊主にしたそうです。相殿に神功、住吉、玉垂を祭つていますが、やはり、これも玉垂より古い。今年、千八百年祭だそうです。高良玉垂は数年前に千六百年の周年祭がありました。

昼食後、三瀨町では、三瀨廟院、烏帽子塚古墳、弓頭神社。廟院は白い貝塚の上に玉垂の古

墳があつたそうです。烏帽子塚古墳は前方後円墳だったそうですが、今は完全に宅地化されてしまつていました。弓頭神社は三沼の君が祭られていました。

いよいよ問題の大善寺玉垂宮へ。玉垂宮は久留米市大善寺町宮本にあり、祭神は武内宿禰、八幡大神、住吉大神。古賀達也氏は九州王朝は筑紫からここに遷都したといい、古田武彦氏はこの鬼面尊神は玉垂命だろうといい、松延清晴氏は玉垂命は鬼なんかではないといい、何が何やらよくわからないので来てみたものの、来てみればすぐ分かるというものでもありません。とにかく、正面から鳥居をいれた写真を撮ろうと思つて広川添いの道路まで出てみると、灰塚さんに「この川ですよ。アレナレ河というのは」と声をかけられました。

『高良玉垂宮神秘書』五三三に「大善寺ノコト、高良大并タイタウアレナレ河ト云所ヨリ、御フ子ニメシ、チクセンウミノカ

ウチエツキ玉フ、ソレヨリクハウクウトトモニ、ミヤコエノホリ玉フ、クハウクウ御ホウキヨノノチ、仁徳天皇十七代ニ大善寺ノマエ川ニツキ玉フ、ハシメテノ御ツキノトコロナレハ、タイタウ御フ子ヲ イタシ玉、河ノ名ヲ カタトリテ、カノトコロヲハ アレナリ河トハ名付タリ、……」とあるのとこの。アレナレとは『書紀』神功撰政前紀にある阿利那礼ではないのか。『好太王碑文』にある阿利水ではないのか。であれば、これは松花江、鴨緑江、大同江、礼成江、闊川、と朝鮮半島を南下した川の名前だが、なぜ、このような名前がつけられたのか。十六代仁徳天皇ならわかるが、仁徳天皇十七代とはいつことなのか。疑問は逆にふえる一方でした。

三沼の君の墳墓との伝承のある御塚、権現塚から、高良大社、神籠石、最後に曲水の宴の跡ではないかといわれる筑後国府跡を見て帰りました。

磐井の乱を考える(II)

兼川 晋

大芝氏の考えを大芝氏自身の文章から引用すると、以下のようになる。

「古老は云う、「かねて、豪強な豪族で官命不服従なる筑紫の君磐井は、筑紫の伝統的本家三代を弑虐するという大逆を犯した。それは、我が筑豊の倭王分家の雄大迹王のみ世である。王は、直ちに官軍を動発して反乱軍を誅滅した。」と。この解釈では、筑紫倭王本家と筑豊(豊前)分王家(秦王国)が、古老の視野の範囲で無理なく発現する。」

ここで「本家三代を弑虐する」というのは、百濟本紀逸文の「天皇及び太子、皇子、俱に崩薨りましぬ」を、天皇一代、太子二代、皇子三代と数えた場合である。別に皇子を太子の弟とし

て二代に数える考え方もあり、私としては、二代の考え方をとる。「隋書」にある「秦王国」が豊前に当てられているが、これも理由のあることで、私は少しも不審に思わない。ただ、不審なのは、このとき、筑紫の君磐井の上に君臨したと考えられる伝統的本家の王の存在である。

大芝氏の考えられた大逆事件は、太歳辛亥(五三一)年である。この年は九州年号でいえば教到元年で、教到の前には正和、善記、継体の年号もある。磐井の上に君臨した倭王は、これらの年号を定めた倭王以外に想定することはできない。

すると、どうなるのだろうか。九州年号の創始者は筑紫の伝統的本家の王だったのだろうか。古田説は磐井の君を年号創始者と考えているが、これも可能性があるとだけである。継体年号の創始者は、倭の五王の伝統的本家の王ではないのに王位についた。だから継体の詔を発して継体の年号を建元した。そ

れは豊のヲオト王ではあるまいか、というのが、ニュース八二・八三号に書いたわたしの「倭武王を継いだのは男弟王か」「継体は彦太王、男弟王は豊前出身か」である。(ヲオト王の五二一年崩御説と磐井の乱の大和对九州説は撤回、修正する。)

ヲオト(男弟・男大迹・雄大迹)王は、四九四年甲戌に豊の王位を継いだ。時の倭王は武であった。武は天監元年(五〇二年)壬午に梁の武帝から征東將軍に任じられ、間もなく他界するが、武には嫡子がいなかった。

武が健在であったとき、大和の武烈(実体は誰か不明)も、近江の毛野臣も、金村も、鹿鹿火も、磐井も、ヲオトも、武に対しては臣下であった。勿論、職掌や王位継承権保持者としては違いがあつたらう。金村と鹿鹿火は武人であり、王位継承権などは到底持っていない。磐井は高良大社を祀る家柄であり、武人というよりは文人に近く、倭の王位継承候補者にはなりえた。

だから磐井の君なのである。倭王・武の跡目相続が問題になったとき、倭の王位継承候補者としては、筑紫では磐井の君(キミ)、豊ではヲオトの王(キミ)、火では某のキミ、大和では某のキミ……というような状況の中で、とにかくヲオトが倭の大王(オオキミ)の座についた。五〇三年癸未の歳である。これはヲオトが豊の王位を継いで十年目にあつてた。早速、百濟の斯摩は画像鏡をヲオト王に贈った。ヲオト王が武を継承したことは、百濟も国際的に承認した事実なのであつた。

武の兄が興、興の父が斉、代々、都督府を置く筑紫にあつて倭王を称していたが、ヲオトが倭王になると、翌々年、都を筑紫から豊に遷した。ヲオト王十二年(五〇五年)乙酉の弟国遷都である。都が豊に遷ったのだから、諸国の朝貢船は豊の港に入るべきなのに、諸国の船は今まで通り筑紫の港についた。都督府も、今まで通りに機能した

のどろろ。いきおい、磐井は忙しかつた。先王・武の墓もつくらねばならなかつた。都督府にも顔を出して、倭王への朝貢の品は仕訳して豊の都に送らねばならない。筑紫の磐井の君の立場は倭王代行の色合いさえ帯びるようになり、金村や鹿鹿火との差は目についてくる。それが二人の嫉妬心を煽ることになった。しかし、諸国が筑紫の港に朝貢船を入れ、豊の港まで船を回さなかつたのは、穴門の急流を避けたからである。これを、金村らは、磐井が「外は海路を邀へて、高麗・百済・新羅・任那等の国の年に職貢る船を誘り致し」と讒訴した。この他にも磐井は「内は任那に遣せる毛野臣の軍を遮り」といわれているが、これは必ずしも事実とは考えられない。なぜならば、この一連の記述には誤りがある。南加羅（金官伽耶）が新羅に奪われるのは毛野臣が任那に派遣された後のことである。しかるに、ここでは、新羅に奪われた

南加羅を興すために派遣する毛野臣の渡海を妨げたかのように詰っている。この記述をそのまま事実として容認することは難しい。ただ、金村や鹿鹿火が、武人として支持するヲオト王の武断的韓半島政策に対して、磐井が批判的立場にあつたことは考えられる。ヲオト王二年（五一四年）甲午、夏六月、ヲオトは任那のテコ入れを図るべく南韓派遣の計画に磐井にも協力を要請したのである。それを伝えに来た鹿鹿火や金村に磐井は言つた。「今こそ使者たれ。昔は吾が伴として、肩摩り肘触りつつ、共器にして同食ひき。安ぞ率爾に使となりて、余をして備が前に自伏はしめむ」と。磐井、ヲオト、金村、鹿鹿火の関係が、昔、武王のもとに臣下であつたとすればよく理解できる言葉である。同年秋八月に、ヲオトが発した磐井を討てとの詔や鹿鹿火の言葉は、全文『芸文類聚』武部の戦伐・将帥の条などをつなぎあわせたものと指摘されて

いるが、「今こそ使者たれ。……」には、これとはくらべものにならぬリアリティがある。金村・鹿鹿火の報告を聞いてヲオトは決断した。「筑紫の磐井、反き掩ひて西の戎の地を有つ。今誰か將たるべき者」。金村らが答える。「今鹿鹿火が右に出づるひと無し」と。こうして磐井は討たれることになり、戦鬪は突然、筑後ではじまつた。筑後でしかはじめる必要のない戦鬪だったのである。磐井は、これが、鹿鹿火らの讒言による征討であることを知つていたのかも知れない。わざわざヲオトの根拠地に近い上膳の県に向かつて逃れたということ、ヲオトに直訴釈明して、ヲオトの誤解を解こうとしたのかも知れない。

磐井が斬られたのはヲオト王二年（五一五年）乙未の冬——葛子は糟屋の屯倉を献じて死罪を免れた。有力な王位継承候補者だつた筑紫の君を討ち果たした後、金村や鹿鹿火に突き上げられて、二四年（五一七年）丁酉、ヲオトは継体の詔を發した。「……中興の功を立てむとするときには、いづれか嘗より賢哲しき謨謀に頼らざらむ。」漢の中興の祖・武王の謨謀といわれるのは「建元」の年号を建てたことであつた。ヲオトはこの年に「継体」の年号を建元して二四年（五一七年）丁酉を継体元年とし、都は豊に遷しても国体は倭を継承していることを宣言する。『二中歴』の「人代記」によれば、「継体二十五（応神五世孫、此年年号始）」があり、『書紀』とは一年違いであるが、この時期の一年違いは百済にも日本にも実例が多く、特に日本では豊前の戸籍簿に実例がある。倭国は、五王の時代に、すでに「東は毛人の五十五国を征し、西は衆夷の六十六国を服し、渡つて海北の九十五国を平らぐ」とはいつても、それはまだ統一国家にはほど遠い連合王国だったのである。

『二中歴』の年記によれば、善記三年（五二四年）甲辰（発護成始文）とある。これはヲオトが国内の渡来人に護符を発行し新しい税法を定めたということである。渡来人の列島内移動を把握して、彼らがどこに定住しても租税を徴収することができるようにした。ヲオトが考案した富国強兵策である。『二中歴』は、この記事に続いて〈善記以前、武烈、即位〉と書いているが、ヲオトは後に武烈と諡されたのかもしれない。（ヲオトは確かに年号開始以前に即位していたし、この時点では生存もしていた。このことを『二中歴』の年記が、わざわざ、ここに記録した理由は別に考える。また、この頃から、倭王が天皇、天王と呼ばれたり、倭が日本や九州を称したり、それまで筑紫にあった難波津の呼称を豊の三津に移したらしいことについても別に考える。）

この後、毛野臣は任那に渡り南韓の秩序回復を図るが、悉く

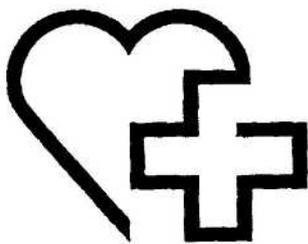
失敗して、正和五年（五三〇年）甲戌、対馬で病没する。教到元年（五三一年）辛亥が大逆事件の年だとすれば、事件にからむ日本の天皇に該当する大王はヲオト王の他にはいない。ヲオトが武を継いで倭王になったのは五〇三年であるから、即位翌年を継体元年として計算すれば、五三一年は干支は別にして継体二八年——一書のいう継体崩御の年と一致することになる。崩御の真相は推測するだけである。武王の上表文にも亡考・済が「奄に父兄を喪ひ」とあるが、その事態にいたった理由は書かれていない。

磐井の石人の記録

編集部

南韓の秩序回復を韓半島政策の柱としたヲオトの死の翌年、五三二年壬子に金官加羅は新羅に投降する。（つづく）

天明元年（一七八一）に刊行された『漢和古雅集録』という本に、「筑後国風土記」逸文にある磐井の石人の記録が、かなり詳しい見取り図までつけて集録されていたと、福大の中野三敏教授が西日本新聞に書かれていた。著者は松田五松という伊勢の神官で、豊宮崎文庫の蔵書の中から抄書したもの。巻末五丁ほどの「筑後国一條原石人図考」がそれで、四丁が見取り図、一丁が『積日本紀』を引いた解説である。見取り図は石室、石人、石猪、衝頭などの大まかな配置図、また「石人全図」として前面、背面の寸法が詳しく書いている。今、上妻郡一條原村南十一步二当テ、長嶺ノ山中ニ有石人、僅ニ一ヲ存セリ、石人ヨリ十間バカリ東ニアタリテ一ツノ石ノホラアリ、疑ウラクハ風土記ニ所謂石蔵ナランカ、内ニ入ルコト七尺五寸、横三尺五寸、高サ二尺八寸、棟ノ高一尺三四寸、口ノ広サ一尺三寸余」などの解説があるそうである。



正確な調剤で
皆様のご信頼に
お応えする

大賀薬局

大賀薬局

福岡ビル店741-7667
天神コア店721-7781
天神地下街店771-6543
西鉄本店街店751-1218
海川サニ一店531-1051
香椎店681-1277
東住店831-8410

大宮前店651-3219
香椎サニ一店551-1017
二日市店922-3174
平塚店524-1447
浜の町店751-0100
日の堂サニ一店940-35-0257
磯しろや店871-6119

大塚店561-7072
けやき通り店781-9450
宇美店933-8660
白水店584-2080
熊野川店953-3721

福岡支店

西新店741-7667
大名店721-7781
呉服町店771-6543
博多駅前店741-7667
中興町店721-7781
宇美駅前店771-6543
竹下店751-1216

本部: 〒810-0041 福岡市中央区大名1丁目15番9号 TEL092-721-5630 FAX092-751-0805

数量化の手続きを変えれば 卑弥呼は…… 天照大神ではなかった

松 中 祐 二

る。親子間の継承が続く場合と、兄弟・従兄弟継承のような同世代継承が多数ある場合とでは必然的に在位年数は大きく変わるはずである。

安本理論が基礎資料とする用明・昭和天皇の九四人のうち、同世代の天皇が一人のみの人物は僅か二〇%の十九人である。

これに対し、用明以前の古代天皇については、三十人のうち武烈・継体を同世代と見做しても十六人もいる。神武の五代前の天照大神まで入れると、更に五人増え三五人中二一人で六〇%にもなる。

このように王位継承形態が大きく違う前者から後者の古代天皇の年代を推定することには無理があり、安本理論の説得力は極めて弱いと言わざるを得ない。ならば、安本理論の平均在位年数より確度の高い基準はないだろうか。

思うに、天皇家の世代毎の平均一世代年数（以下、世代年とする）から推定してはどうだろうか。

うか。巷で「一世代三十年」と言われるそれである。

これなら一世代に何人天皇が居ようが関係ない。孫継承でもその親の世代も計算に入れると問題ない。世代年に規則性があれば天照大神の年代を推定することも可能となる。

●世代年の求め方は、第一に直系の人物を抽出する。第二に天皇の生年（西暦）の間隔の平均を計算する。或いは、後継者を生んだ年齢の平均も世代年になる。計算が簡便なのは前者である。なぜなら、求めたい時代の初代と末代の生年の差を世代数で割るだけで世代年が分かるからである（計算例参照）。

●平均一世代年数（世代年）計算例
* 欽明～宇多の世代年 $(367 - 510) \div (37 - 26) \text{ 世代} = 32.45 \text{ 世代年}$
* 二倍年層換算 神武～欽明の世代年 $(510 - (-87.5) - 1) \div (26 - 6) = 29.83 \text{ 世代年}$

●そこで次の条件により天皇を抽出し、その生年から世代年を求めこれから安本理論と同じ手法で古代天皇（天照大神の

生年年代を推定した。

① 継体の出自以外は、書紀の天皇の系譜を事実と見做した。

② 原則として今上天皇の直系尊属の人物のみを対象とした。ただし別系統の継体は年齢的に武烈と同世代の人物と見做し、計算上便宜的に仁賢の直系と見做した。

③ 仲哀は神功皇后の年代を含めた。

④ 天皇以外の人物が直系にあたる場合、グラフ作成のために（1）同世代の天皇の中で在位年数が最長の人物を直系天皇と見做した。（2）同世代に天皇がない場合は、前後の天皇の間年をその世代の人物の生年と見做した。

●以上の条件で、天照大神から第百二五代今上天皇までの直系の人物のみを抽出すると次のように七七人となった。つまり天照大神から七七世代目が今上天皇ということになる。

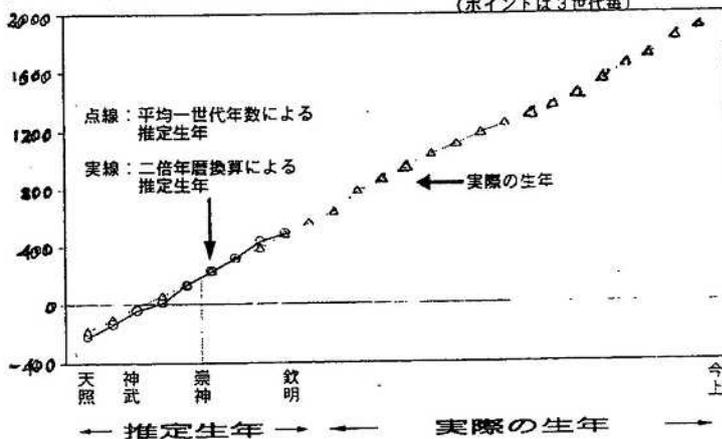
「天照大神・天之忍穗耳尊・ニギ尊・彦火火出見尊・ウガヤ

安本美典氏は、世界の王の時代別平均在位年数から、古い天皇ほど在位年数は短くなり、用明以前の平均は約十年であると推論した。そして用明から神武の五代前の天照大神までを一代十年とすると卑弥呼の時代に一致することから、卑弥呼＝天照大神説を展開している。これを仮に安本理論とする。しかし安本理論の視点を変えて再考察すると違う知見が得られたので報告したい。

●安本理論は、天皇の系譜を無視している点で大きな疑問がある。

フキアエズ尊・神武・綏靖・安寧・懿徳・孝昭・孝安・孝霊・孝元・開化・崇神・垂仁・景行・(成務)・仲哀・応神・仁徳・履中・(雄略)・仁賢・継体・欽明・敏達・○・舒明・天智・(持統)・光仁・桓武・嵯峨・仁明・光孝・宇多・醍醐・村上・円融・一条・後朱雀・後三条・白河・堀河・鳥羽・後白河・高倉・後鳥羽・土御門・後嵯峨・後深草・伏見・後伏見・光厳・崇光・(後円融)・(後小松)・後花園・後土御門・後柏原・後奈良・正親町・○・後陽成・後水尾・霊元・東山・(中御門)・(桜町)・光格・仁孝・孝明・明治・大正・昭和・今上」(括弧内は見做し天皇名。○は天皇不在の世代)

① 平均一世代年数と二倍年曆による推定生年



明の前世代に当たる継体以前の直系天皇の生年年代を推定した。計算結果

● 欽明以降の生年をグラフ①の欽明以降の折れ線で示した。安本理論では、天皇の平均在位年数は時代が上るほど短くなるとしている。そこで欽明(五一〇年生)から今上天皇(一九三三年生)から今上天皇(一九三三年生)を四分割して世代年を計算してみた結果、

A 平均一世代年数

	生年	平均一世代年数
26 欽明	510	
37 宇多	867	32.45
51 嵯峨	1220	25.21
65 陽成	1571	25.07
77 今上	1933	30.17
全世代平均		27.90

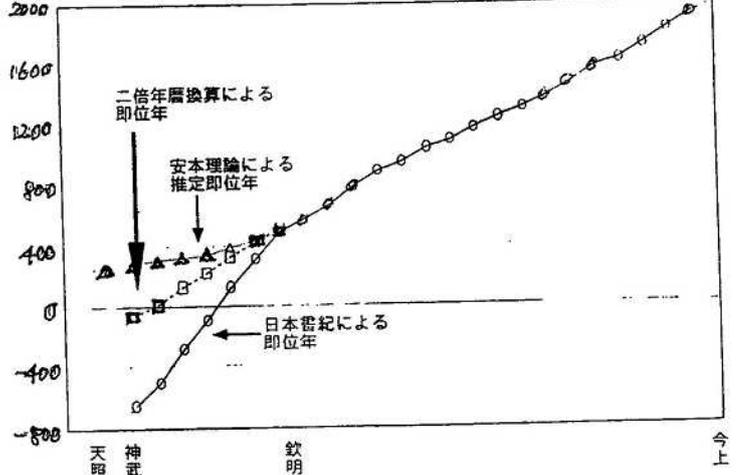
(天皇名左の数字は天照からの世代数)

年生)を四分割して世代年を計算してみた結果、

「第1期」欽明〜宇多
 「第2期」三二・四五年、「第3期」宇多〜後嵯峨
 「第4期」後陽成〜今上

平均二七・九〇年となった(表A)。長い順に、1↓4↓2↓3期となり、時代の新旧による傾向の違いは全く無い。古いほど短いなら欽明以降のグラフ折れ線は右肩上がりになるはずで、事実、在位年数を基準とする安本理論のグラフはそうになっている。しかし世代を

② 天皇即位年



基準とするグラフ①の折れ線はほぼ直線になっている。つまり世代年は時代を超えてほぼ一定の間隔で続いていると見做して良いのではなからうか。因に書紀等による天皇の即位年を世代毎にグラフ②にしてみた。やはり欽明以降の折れ線はほぼ直線になる。そして欽明以前の折れ線のうち日本書紀と安本理論に

B 推定生年・即位年

世代	二倍年曆による推定即位年	二倍年曆による推定死亡年令	二倍年曆補正後の推定生年	世代年による推定生年
1 天照			前227.0	前188.5
2 天照			前199.1	前160.6
3 ニギ			前171.2	前132.7
4 天照			前143.3	前104.8
5 天照			前115.4	前76.9
6 神武	前 63.5	63.5	前 87.5	前 49.0
7 綏靖	前 24.0	42.0	前 49.5	前 21.1
8 安寧	前 7.5	28.5	前 17.0	7.8
9 懿德	12.5	38.5	前 9.5	35.7
10 孝昭	30.0	56.5	15.0	63.6
11 孝安	71.5	68.5	54.0	91.5
12 孝聖	122.5	64.0	96.5	119.4
13 孝元	160.5	58.0	131.0	147.3
14 開化	189.0	57.5	161.5	175.2
15 崇神	219.0	60.0	193.0	203.1
16 垂仁	253.0	70.0	232.5	231.0
17 景行	302.5	53.0	279.5	258.9
18 (成務)	332.5	53.5	309.5	286.8
19 仲哀	363.0	76.0	326.0	314.7
20 応神	402.0	55.0	368.5	342.6
21 仁徳	423.5	?	?	370.5
22 履中	467.0	35.0	435.0	398.4
23 (雄略)	494.0	?	?	426.3
24 仁賢	511.0	?	?	454.2
25 継体	520.5	41.0	493.0	482.1
26 欽明	540		510	510

(仲哀は神功を含む)

よるものは欽明以後の折れ線から屈曲していることも判る。世代年は、言い換えれば後継者を生んだ年齢の平均ということである。子供を生む平均年齢は生物学的には時代によって大きな差はないのではないか。つまり世代年は時代による違いが少ないことが予想される。そしてこれらのグラフはそれを裏付けていることになる。

●そこで全世代の平均二七・九〇年を基に古代天皇の生年を推定してみた。これが表Bの4列目およびグラフ①の天照大神、欽明の点線部分の折れ線である。今上天皇から天照大神まで

ほぼ直線になっていることが判る。書紀の天皇系譜が正しければ、神代の世代の年代もこのグラフと大きく違わないのではなからうか。

●次に、二倍年曆について計算してみた。

『紀』は少なくとも継体以前は二倍年曆で書かれている(失われた九州王朝)、また継体の死亡年を古田説の五三四年として、それ以前の即位年を二倍年曆で換算したのが表Bの1列目およびグラフ②の点線部分である。欽明から屈曲していた即位年の折れ線もほぼ直線になった。安本理論とどちらが現実的か明瞭

に判る。

●表Bの3列目およびグラフ①の実線部分は、『日本書紀』による天皇の死亡年令を二倍年曆で換算し(表Bの2列目)、これから生年を推定し、更に、神武以前は全世代の世代年二七・九〇年で計算したものである。

二倍年曆による推定生年では、神武、欽明間の世代年は二九・八三年になった。つまり欽明以降の実際の世代年二七・九〇年との差は、わずか一・九三年であり、極めて現実的である。これらは二倍年曆の実在性を窺わせる。

●グラフ①の二倍年曆による神武、継体間の推定生年の折れ線は若干蛇行しているが、世代年による推定生年との平均誤差(差の絶対値の平均)は二四・三二年で一世代の違いしかない。二十世代を通じた平均誤差が一世代ということは極めて近似した数字と言えるのではないか。

(I) 実在性を窺わせる二倍年曆と世代年による推定との近似は、両者の現実性を相互に保証しているように見える。

(II) 荒唐無稽と思われた『日本書紀』古代天皇の即位年代記述も二倍年曆を考慮に入れると極めて現実性をおびてくる。

(III) 二倍年曆によると天照大神、ニギの時代は前三世紀末、前二世紀中葉ということになる。世代年による場合も一世代違うだけとなる。この時代は筑紫遺跡の出土物が大きく変化し、古田説では天孫降臨の時代とされている弥生前末・中初にあたる。つまり考古学的所見と計算結果は古田説を補強する結果となった。

(IV) 卑弥呼の時代に相当する天皇は崇神になった。最近、古墳時代は卑弥呼の時代に近いと言われ出した。すると崇神・垂仁が銅鐸文明を駆逐し古墳時代に入ったとする古田説を、これも補強することになった。

結論

(V) 本稿の意図は、この計

算の結果から何かを論証するといふものではない。そもそも政治的・有機的な天皇継承期を数学的に推定するのは危険な検証法だろうと思う。安本理論では天照大神は三世紀中葉としているが、同じ手法でも視点を交えただけで四百年以上も違う結論になるのである。

しかし、二倍年曆による推定生年の世代年が実在性を示し、二倍年曆と世代年による推定生年が極めて近似し、更にこれらと考古学的所見との関係が古田説を補強することは、偶然にしては出来過ぎの感がある。

一つの目安にはなるかもしれないので、参考までに報告させて頂いた。

壬申の平定について

室伏 志暉

先号で私はわが国最初の年号とされている六四五年の大化

は、実は倭国の九州年号の最後に置かれた年号の借り物で、そこに『竹取物語』を挟むとき倭国から日本国への王朝交替は、次の大宝建元がはからずも語っているとした。その大化の内に九州王朝・倭国から近畿王朝・日本国への転換に異かけた藤原不比等が仁王立ちしていたのだが、『日本書紀』は万世一系の天皇制としての「悠久の大和史観」を立ちあげたため、その功績を記念する年号は天智と父・鎌足が蘇我氏を討伐した乙巳の変に振られ、そこに改新の詔を後の大宝律令等から張り付け、現在ある大化の改新像を創りあげた。この造作によって天智の近江政權に箔はつき、これによってようやく天武の蜂起は壬申の乱とされた。しかし私は大化年号と同様、壬申の乱を九州王朝論の中に奪回し、真実あらしめたいと思う。

ところで倭国から日本国への転換点は、大日本帝国から新生日本国への転回が太平洋戦争(第

二次世界大戦)における敗北にあつたように、倭国が唐・新羅に白村江で敗れた(六六三年)ことに始まった。百濟はすでに六六〇年に敗れ、唐は熊津都督府ほか五都督府を置いた。その三年後、同じく唐の軍門に下つた倭国に何が置かれたのだろうか。

烈な占領政策を見通すことなく倭国から日本国に至る屈折した誕生の秘密は解けないのである。

天智紀六年十一月の条に「百濟の鎮將・劉仁願が熊津都督府熊山県令上柱国司馬法聰等を遣して、大山下境部連石積等を筑紫都督府に送る」とある。これを早急に唐制の筑紫都督府とし、現在の筑紫都督府跡地に回収すべきであろう。そのことによつて郭務悰の倭人を畏怖せしめた占領政策は旗色鮮明となり、斉明天皇の死後、皇位がままならないため、天智がなぜ近江に王朝を開き、郭務悰の帰国をまつて天武が旗揚げしたのかも見えてくるはずである。それは近江朝を開くまで大和朝廷の前身は九州にあつたことの傍証となり、大芝英雄や私の豊前王朝説の正しさを保証しよう。この唐の苛

厚木飛行場にパイプをくゆらせ降り立った連合軍総司令官マツカーサーは、皇居を占領しなかつたのは天皇制を温存したからだが、首都東京の皇居前の三井ビルを占拠し皇居を睥睨した。もし天皇制を廃止する方針であつたなら帝国のシンボルである皇居が連合軍総司令部(GHQ)に落ちたことはまちがいない。とするならこの天智紀六年にある筑紫都督府を無視して、白村江の敗戦後を語ることはGHQを無視して今次大戦後の日本を語るに似ている。大和一元史観はこの倭国の敗戦の意味を大和朝廷の外交政策の失敗とし、唐使・郭務悰が一度とて都の飛鳥に來ないことを疑わない不感症な学者の内に育つた。また九州王朝論はこれまで唐使・郭務悰の役所が何であるかを詰めることなく、まつげの先

にある太宰府にある都督府趾跡を見逃している。古田武彦はこれを中国の南朝から与えられた倭王の安東大將軍の政務跡としたが、私は白村江の敗戦を契機に倭国を解体に導き、倭人を畏怖せしめた唐制の都督府に宇義通り回収すべきであると思う。

この筑紫都督府の設置によって、倭国は唐の鉄鎖の元に置かれ、倭国の甘い夢は吹っ飛んだのである。我々はこれまで神武東征を近畿大和への侵入としてきたため、この占領下に入った九州にあつて、斉明後の皇位がままならないため、そこを見限り、辛うじて近畿に落ち伸びた天智政権の意味を見失っているのだ。それは都督府趾跡の意味の紛失に見合うものである。それを後に近江朝と記録したのは大和一元史観を生み出した『日本書紀』一流の筆法で、天智政権の衣鉢を継ぐ者の意思によるう。

六七二年五月三十日、郭務儂は倭国解体を見届け帰国の途に

つく。それを見届け六月二十四日、天武は九州から東国遠征に向かうのである。この天武の旗揚げを唐の支援と古田武彦は天武の吉野の歌から解したが、それもまたあり得ない。唐の支援がほしいなら天武は郭務儂が本邦にいる内に立ち上がったことであろう。帰国後ほぼ二十五日して天武の蜂起があるのは唐の虎の尾を踏むことを避けるためであつたらう。

おそらく九州の豊前の倭国東朝にあつて人心を集めていた天武は、近畿の近江に逃げ百濟寄りの最後の政権を細々と営んでいた天智政権を平定することによつて、いわゆる磐井の乱後に成立した葛子以来の藤王朝の下に倭国再興を唐の占領終結と同時に目論んだのである。白村江の戦いで同盟を組んだ唐と新羅は、すでに六七〇年に戦端を開くまでに関係は悪化していた。恐らく天武は新羅寄りの皇子で、九年に及んだ唐の占領に耐え、倭国再興のその時を待っていた。

倭国を数百年にわたり伽耶（任那）をめぐる政争の渦に巻き込んだ新羅派と百濟派の決着は、今や天武による天智派の平定をもつて新羅派の下に帰そうとしていた。その藤王朝による最終平定が九州ならぬ近畿を舞台としたことによつて、天武は思わぬことに近畿の物部王国に迎えられ、倭国東朝にあつた藤王朝は近畿大和において再興を見たのである。それは唐による九州

王朝・倭国の解体が完膚なきまで行なわれたことを物語ると同時に、この天武による藤王朝の近畿における再興劇がほかならぬ大和朝廷の誕生であつたことを告げよう。しかし正史『日本書紀』は、神武以来の倭国東朝の歴史に、「天智王朝を繋ぎ、「悠久の大和史観」を立ちあげ、天武の淵源を隠した。

フロイトによれば、「書き換え」と「場所の移動」の意味があるという。『日本書紀』は本来、天皇制の最大功労者であつた天武

の業績を天智の内に掠め取り、かつての九州の倭（やまと）の歴史を近畿・大和にしつらえ、それに取り込むことにより隠すことに成功した。

昨年から富本銭、日本式庭園、亀型水槽と予想もしない発見に大和飛鳥は沸き立っているが、今のところそれらは『日本書紀』の記述に倣つて天武や斉明の業績に数えられている。しかしそれは大和一元史観を造作したのが記紀史観であることに思い至るなら、これらすべては近畿に天皇制を立ちあげ大和朝廷を創出した天武と、その飛鳥に天武を迎えた物部王国の業績の内に本当は回収されるべきであるのだ。飛鳥板蓋宮跡は早晩、神武の昔に倣つて天武と物部氏の連合の下になつた飛鳥浄御原宮跡に変更されることなくして大和飛鳥の歴史は語りえないのである。

飛鳥に散らばる亀型水槽を初めとする石像物は、記紀からは説明不可能で、それは道教を踏

また天武と物部氏の遺跡なら、天武が造営を開始した日本一の大都・藤原京や文武天皇の即位に至る雛型は、中国の唐に求めるより新羅に求めるのがよい。それは遣新羅使の派遣の多さがそれを物語ろう。今回、酒船石近くから出現した亀型水槽は新羅にも例があり、統一新羅を実現した文武王の名が、名実ともに日本国を立ちあげた天皇に重なることは偶然ではないが、天武から持統そして文武に至る即位過程で天皇制は天武から天智を戴くものに変質し、朝廷の実質は百濟派が牛耳るに至った。

したが、私はそれを物部連雄君としないわけにはいかなかった。彼こそ天武の東国行きに先立ち、物部氏の組織化を目論んだ朴井連雄君と別でない。彼は天武紀下の死後功賞において、次期天皇に天武を迎えることを物部氏を代表して伝えた大三輪真上田子人君が迎君の諡号を与えられたように、物部氏の氏上を保証された。それは壬申の平定における最大功労者が彼であったことを語るものである。

この壬申の平定の意味を、天智朝における天智の子息・大友皇子と弟・大海人皇子(天武)との争いに矮小化し、天智の血統に天武を取り込むことよってその血統を消したのが『日本書紀』であった。天武の血筋が消されたように、物部氏の新たな氏上となり、天武の手足となつて藤原京の造営に尽力したであろう物部連雄君の業績を語るものはない。いや彼はその業績を消されたばかりか、彼の墓は藤原不比等によつて暴かれ辱められたことであろうが、それについては「玉藻刈り」として改め論じたい。(H12・6・8)

前号の「ヒャーガンサン古墳の壁画」要旨の中に誤りがあり、お詫びして次のように訂正します。

【誤り】日田・穴観音古墳の円文は北斗七星の一つが落剥したものである。【訂正】日田・穴観音古墳奥壁の円文は六個描かれている(「裝飾古墳の世界」朝日新聞社・一九九三・一九二頁)が、実はその後大分県教委が精密な調査をして、円文が九個あることが確認された。従つて北斗七星の可能性はなくなり、お詫びして訂正させていただきます。

【誤り】点は星である。α星やβ星のように大きく輝く星は点の集合である。集合した点と点をつないで文様化したものが円文である。【訂正】ヒャーガンサン古墳の文様は次の要領で描かれている。例えばα星の周囲に浮かぶ(肉眼で見える)星と星をつないで円文が描かれた。すなわち、このように、描こうとする主星の周囲を素材にして種々の図像が描かれている。

【誤り】中央のスパルには特別に手を加えて：【訂正】中央の三ツ星に特別に手を加えて：【誤り】表ツツノヲはスパル三星と：【訂正】表ツツノヲは三星と：【誤り】別称……【訂正】……住吉神の別称である向置男開襲大歴五御魂速狭騰尊(ムカヒツノヲキキノオホフイツノミタマハヤサカリノモコト)と、オリオン座の三ツ星とは何か繋がりはないか。実はこの祭神名は難しいのでよく分からないが何となく関連性があるような気がする。更に研究してみたい

【誤り】神功によつて住吉に祀られるまでは三神であった【訂正】神功によつて住吉大社に祀られるまでは、住吉大神といわれることはなく、筒男三神だけであった。

【図書紹介】

【九州王朝の論理】 明石書房

古田武彦・福永晋三・古賀達也著

一九五〇年 定価 一八〇〇円十税

【太宰府は日本の首都だった】

内倉武久著 ミネルヴァ書房

二六六〇年 定価二六〇〇円十税

【特別例会案内】

日時 九月十六日（土）

十三時～十六時

会場 ももちパレス視聴覚室

テーマ ここまでわかった

志岐・原の辻遺跡

講師 原の辻遺跡調査事務所

杉原 敦史 主事

【事務局便り】

○八月は夏休みですが、その夏休み前に、「元岡遺跡の保存活用を考える会」主催の公開講座「糸島の古代製鉄」が開かれます。講師は宮崎公立大学教授の奥野正男氏。会場はお馴染みの早良市民センター3Fの視聴覚

1999年度決算報告書 (99.4.1～00.3.31)

収入の部			
科目	予算	決算	増減
前年度繰越	358,379	358,379	
年会費	600,000	682,000	. 82,000
一般参加費	9,000	21,000	. 12,000
ニュース広告料	120,000	110,000	△. 10,000
預金 利子	1,002	1,002	
賛助金		30,000	. 30,000
雑収入		19,320	. 19,320
前受金		252,000	. 252,000
合計	1088381	1473701	. 385,320
支出の部			
ニュース発送費	230,000	154,000	△. 76,000
ニュース作成費	160,000	138,000	△. 22,000
会場費	30,000	17,220	△. 12,780
講師 謝礼	60,000	43,000	△. 17,000
事務通信費	168,000	168,000	
事務費	170,000	126,130	△. 43,870
研究調査費	60,000	9,570	△. 50,430
会議費	70,000	54,850	△. 15,150
雑費	40,000	26,118	△. 13,882
予備費	100,381	0	△. 100,381
次年度繰越		736,813	. 736,813
合計	1088381	1473701	. 385,320

2000年度予算 (00.4.1～01.3.31)

収入の部		
科目	予算	摘要
前年度繰越	736,813	前受金を含む
年会費	600,000	100名として
年会費前受金	△ 252,000	
一般参加費	21,000	6回7名参加
ニュース広告料	120,000	6回2件募集
預金 利子	506	
合計	1,226,319	
支出の部		
ニュース発送費	170,000	ハガキを含む
ニュース作成費	160,000	6回発行予定
会場費	30,000	例会6回予定
講師 謝礼	60,000	
事務通信費	168,000	
事務費	150,000	
研究調査費	60,000	
会議費	100,000	
出版準備金	200,000	ニュース合本
雑費	40,000	
予備費	88,319	
合計	1,226,319	

1999年度の決算は適正である事を認めます。

2000年4月19日 淵江順三郎 印

室。日時は七月二十九日（土）の十三時半から十六時半。講演に引き続き、質問、意見交換の時間があります。この機会に、遺

跡の保存活用に関する市民の声をあげようではありませんか。○十一月は、最近の近畿の遺跡見学会を検討中です。

竹下駅正面

救急指定

医療法人
愛風会

さく病院

〒816-0095福岡市博多区竹下4丁目6番25号
電話 092-471-1139 (代表)

内科・外科・整形外科・
胃腸科・循環器科・
耳鼻咽喉科・皮膚科・
理学診療科（理学療法・
作業療法承認施設）
放射線科・人間ドック・

訪問看護 〔駐車場有〕